

公表

児童発達支援事業所における自己評価総括表

| | | | |
|----------------|-------------|---|----------------|
| ○事業所名 | ともしきスクール | | |
| ○保護者評価実施期間 | 2026年 2月 1日 | | ～ 2026年 2月 28日 |
| ○保護者評価有効回答数 | (対象者数) | 7 | (回答者数) 7 |
| ○従業者評価実施期間 | 2026年 2月 1日 | | ～ 2026年 2月 28日 |
| ○従業者評価有効回答数 | (対象者数) | 7 | (回答者数) 7 |
| ○事業者向け自己評価表作成日 | 2026年 3月 2日 | | |

○ 分析結果

| | 事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること | 工夫していることや意識的に行っている取組等 | さらに充実を図るための取組等 |
|---|--|--|---|
| 1 | 言語聴覚士による専門的な個別療育体制 | 言語聴覚士が在籍し、標準化された検査を用いてお子様の言葉の発達を数値・グラフで可視化しています。主観に頼らない根拠に基づいたアセスメントを行い、一人ひとりの特性に合わせた「オーダーメイドの個別プログラム」を立案しています。指導においては、机上課題だけでなく遊びを通じた自然なやり取りの中で、「伝えたい」という自発的な意欲を引き出す設定を工夫しています。また、1時間半という枠を活かし、毎回の送迎時に保護者様へ専門用語を避けた分かりやすい言葉で療育内容をフィードバックし、家庭での関わり方も含めた一貫性のある支援を意識しています。 | 個別療育で培った成果を、保育所や幼稚園、小学校等の集団生活の場でも発揮できるよう、関係機関との情報共有(移行支援)の仕組みをさらに強化します。代替コミュニケーション手段(絵カードやPECS等)の導入をさらに進め、より多様なコミュニケーション手段を提供できるよう、職員全体の技術向上を継続的に行っていきます。 |
| 2 | 「完全個別」だからこそできる家族支援 | 個別療育の特性を最大限に活かし、毎回の送迎時に「今日お子様がどう言葉が発したか」「どんな意図でその教材を使ったか」を、その場で詳細にフィードバックしています。大規模な集団施設では難しい、ご家族一人ひとりの細かな悩みに対する即時的なカウンセリングが可能な体制を維持しています。 | 日々の対話に加え、保護者様が家庭でも療育の視点を持てるよう、個別面談の定例化を強化していきます。 |
| 3 | 透明性の高い安全管理体制 | 防犯カメラを設置し、常に支援の様子を可視化することで、虐待防止や事故発生時の迅速な事実確認が可能な環境を構築しています。また、言語聴覚士によるSST等も必要に応じて振り返ることで、安全かつ質の高い療育の維持に努めています。 | カメラ映像を単なる防犯目的だけでなく、スタッフ間の支援技術の共有や、ヒヤリハット事例の具体的な検証に活用し、事業所全体の危機管理能力と療育スキルのさらなる向上を図る。 |

| | 事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること | 事業所として考えている課題の要因等 | 改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等 |
|---|--|---|--|
| 1 | 専門職とのチームアプローチの深化 | 言語聴覚士(ST)を配置したが、その専門的知見を現場スタッフ全員が支援の中で再現・継続する仕組みがまだ発展途上である | 言語聴覚士による定期的な内部研修やケース検討会を開催。全スタッフが専門的なアセスメント視点を持ち、日常生活の中でも一貫した言語・コミュニケーション支援が行える体制を構築する。 |
| 2 | 支援記録の分析・検証プロセスの深化 | 日々の活動記録やヒヤリハットの記録は行っているが、客観的な分析(数値化・構造化)を行い、次の計画へ反映させるサイクルをより強固にする必要がある | 定期的なケース検討会を定例化し、記録や防犯カメラ映像からお子様の行動変容やニーズを深く読み取る「アセスメント力」を全職員で研鑽する機会を増やす |
| 3 | 客観的な視点による外部評価の未実施 | 日々の運営と新規事業(児発)の立ち上げに注力しており、外部機関による客観的な評価を受ける機会を十分に確保できていなかった。 | サービスの透明性と信頼性をさらに高めるため、次年度中に第三者評価を受審する。外部の専門的な視点を取り入れることで、多機能型事業所としての運営の質を客観的に検証し、さらなる改善に繋げる。 |